

研究ノート

「結婚生活を通して見た武者小路と魯迅」

氏名：楊 英華

所属：敬愛大学

はじめに

武者小路実篤と魯迅はほぼ同じ年齢である上に、二人とも大体同じ時期に結婚、離婚、再婚（あるいは同棲）をした知識人でもある。ただし、両者の結婚の状況、離婚の原因は日本と中国の歴史、文化の違いもあって、同じ時代に起こった事柄であると思われないほど遠いものである。共通点があるとすれば、武者小路も魯迅も品行及び性格が正反対の女性と結婚したことと、二回の結婚が両者の人生に大きな転換をもたらしたことであろう。二人は結婚問題、女性問題を通して人間の本质、社会の制度を見据える「目」を養い、自己を最大限に生かすことができたのである。両者の婚姻観を考察し、結婚生活を比較することで、それぞれの人間としての姿を浮き彫りにすることができるのではないだろうか。

人生において一大事に相当する結婚、離婚、再婚に直面した際、両者は各々どのような人生態度を取ったのか、前後どのような変化があったのかを分析したいと思う。

## 一 武者小路の結婚生活

武者小路が自伝小説体に基づいて書いた『一人の男』（新潮社 一九七一・八）によると、彼が二十七歳まで相思相愛の恋愛をしたことがなく、寂しい思いをしていたところに、最初の妻竹尾房子と出会った。

竹尾房子は一八九二（～一九八九）年生まれで、福井県の出身、武者小路より七歳年下である。彼女は政治家の父親と料亭のお手伝い（仲居）の母親の間に生まれた私生児で、性格は異常なほど自信過剰で、自己顕示欲の強い女<sup>注1</sup>であると言われる。

二人は半年あまり付き合った後、一九一二年に結婚した。武者小路の母親は最初二人の付き合いに反対したが、武者小路に説得され、息子を信用して同意した。

その後、武者小路が地上で共存共生の理想社会を建てるために活動を始めた。一九一八年十一月に「新しき村」の土地が宮崎県児湯郡木城村字城に決まり、同年、武者小路が同志十九人と妻と共に「新しき村」の生活に入った。しかし、この「新しき村」で生活を始めた二年目に、房子が「村」の若い男と親しくなったことが夫婦関係を壊すきっかけになった。

一九二二年、ちょうど武者小路が房子の浮気に悩まされている時期に、二番目の夫人になる女性、飯河安子と出会った。

飯河安子是一九〇〇（～一九七六）年生まれで、武者小路より十五歳年下である。彼女は清楚な印象の人物であり、性格はもの静かで、自分の信じることを最後まで貫く人であったという。彼女が二十一歳の時の、一九二一年六月に入村したい旨の手紙を「新しき村」に送った。その後、武者小路が東京で彼女に面接をした。その時の印象をこう語っている。

「熱心なのと、それ以上、僕に気にいったので、村に入ることはすぐ承知した。」<sup>註2</sup>

そこで、飯河安子は親の反対を押し切り、同年十一月に入村、それ以来武者小路の世話係として働いた。『或る男』によると、安子が入村する前に武者小路と房子は夫婦生活がなくなったこともあり、武者小路は慎み深く、人前に入るのを嫌い、勤勉な性格の安子に魅かれたという。

人を一旦愛すると、情熱的になりやすい武者小路は房子と離婚した同じ年に、安子と再婚した。翌年には二人の間に子供が生まれた。

房子と安子を比べると、興味深いことに、両者は性格も品行もまるっきり違うタイプだということである。武者小路自身も認めたように、「僕はその両極端（の女）と結婚した」<sup>註3</sup>のである。

この時期、「新しき村」に集まった人々の人間関係が複雑となり、彼らと武者小路との衝突がますます激しくなった。武者小路は自分が「村」を離れた方が「村」のためになると考えたことと、長女新子が生まれたため、村では子供の教育が出来ないという現実問題から判断して、創立者であるにもかかわらず、一九二五年十二月に離村した。

以上の叙述から、二人の女性との結婚は武者小路に人生の大きな転換をもたらしたと言える。武者小路はかつて自分の二回の結婚について次のように語ったことがある。

「房子との結婚によって「新しき村」が生まれた。安子との結婚は自分の子供が生まれ

た。」<sup>注4</sup>

特に彼は心から引かれ、愛した安子と結婚したことによって、人間に対する信頼を更に高めていった。その結晶として生まれた作品はまず『人間万歳』が挙げられる。彼は自分の気持ちを素直にこう語ったことがある。「安子との関係がよかったので、『人間万歳』を書いた。」<sup>注5</sup>

離村した武者小路は安定した生活環境の中で夥しい作品を世に出した。三女の武者小路辰子が書いた『ほくろの呼鈴』（筑摩書房 一九八〇・十一）によると、武者小路と夫人安子は死ぬまで幸せに暮らしたとのことである。

## 二 魯迅の結婚生活

一九〇六年、魯迅は二十五歳の時に母親の懇請に負けて、一度も会ったことのない女性と結婚した。その女性の名前は朱安と言う。この結婚話は母親が二、三年前から魯迅に持ちかけてきたが、既に日本に留学中であった魯迅は新しい思想を吸収していたため、最初拒否し続けた。しかし、母親の必死の勧めに動かされて、魯迅がついに折れた。

妻になった朱安は一八七八（～一九四七）年生まれで、魯迅より三歳年上である。同じ紹興の出身で、家柄は知識階層であり、魯迅の家とつりあいがとれていた。しかし、朱安本人は読み書きもできず、古い伝統を重んじていた。

結婚した四日目に、魯迅は花嫁を置きざりにして、再び日本に戻った。魯迅はこの愛情のない結婚について、親友の許寿裳に次のように吐露している。

「これは母親が私に送ったプレゼントである。養うのはさほど難しくないが、愛情なんかは私に無縁である。」<sup>注6</sup>

魯迅と朱安との夫婦関係は正に名ばかりであった。魯迅は妻について何も語らなかったが、異性に興味がないということとは又違う。語らないからこそ、意識の中で拘っていると言える場合もある。魯迅が葦素園宛の手紙の中で「私は異性を愛する」<sup>注7</sup>と言ったことがある。その機会は卓抜な精神を有する女性との出会いによってやっと到来した。魯迅の二度目の夫人は、北京女子師範大学での教え子で、許広平という女性である。

許広平は号を景宋と称し、広東省の出身、一八九八（～一九六八）年生まれの、魯迅より十七歳年下の女性である。彼女は早くから新しい思想の教育を受け、親が決めた婚約者がいたが、拒み通した精神を持つ者である。

魯迅と許広平の最初の接触は手紙から始まったのである。一九二五年三月十一日に初めて許広平は魯迅に人生に関する教示を仰ぎたい旨の手紙を出した。その手紙を受けた当日に魯迅がすぐ心を開いた返事を認めた。この時から二人の間で頻繁に手紙の往復が始まった。これらの手紙が後に有名な『两地書』（青光書局 一九三三・四）の中に収められたのである。この恋文のような『两地書』を読むかぎり、最初は教師と学生間の学問と思想の交流を紡ぐ内容であったが、封建的な婚姻制度による被害を同じく体験した二人の手紙は急速に愛を追求する内容に変わっていった。

一九二六年に、廈門に行った魯迅が半年後、許広平のいる広州に移り、そこで二人は十カ月前後暮らし、それから手を携えて、更に上海へ行った。上海に転居した二人は死ぬまで一緒に暮らした。

### 三 両者の結婚生活における共通点と相違点

以上武者小路と魯迅の二回の結婚に関する経過を簡単に述べた。ここでは両者の結婚生活における共通点と相違点を比較する。武者小路の初回の結婚は一九一二年で、二十七歳である。魯迅が朱安と結婚したのは一九〇六年で、二十五歳である。これを見ると、武者小路と魯迅がほぼ同じ時期に、近い年齢で結婚したことが判る。武者小路は最初、反対する母親を説得し、自らの結婚を認めさせた。評判はよくないが、好きになった女性と結婚したのに対して、魯迅の場合は母親を満足させるために、愛情のない結婚を甘受した。この違いは当時の両国の社会事情と家庭環境と関係していると思われる。その当時、すでに明治維新を経て大正時代を迎えた日本では家長制度が中国ほど強くなく、その上に武者小路が次男という気楽な立場もあって、割に苦にせず自分の意志を貫くことができたと言える。しかし、魯迅の場合では、最初の結婚で旧式のままに従ったのは辛亥革命前の中国の封建的な思想である「父母の命、媒酌の言」に基づく婚姻制度の根強さと、魯迅が長男であるという立場と関係している。旧中国では法的な結婚制度はなく、ほとんど父母と仲人との間で家柄の釣合によって決められている。親が当然の権利として強引に取り決める風習があり、そして、それが世間一般の鉄則になって、容易に覆すことができないものであった。

武者小路は結婚するまでは道楽遊びを一度もしなかった。そして、「芸者遊び」、「女郎買い」をする人は「性欲の価値を真に発揮していない」<sup>注8</sup>と批判したことがある。これは

彼がトルストイの禁欲的な姿勢の影響を受けた形跡であろう。その一方、実際のところ、彼は異性を求める気持は決して弱くなかった。最初の恋愛小説『お目出たき人』（洛陽堂一九一一年・二）において、「女に飢えている」と主人公が繰り返して言う言葉は、ある程度に彼の異性に対する渴望を表している。片思いや失恋の辛さを十分嘗めた彼は房子と出会ってから、一月も経たない内に結ばれた喜びを味わい、<sup>注9</sup>まもなく結婚をした事実から見ると、武者小路が性欲の価値を重視する結婚観を持っていたのが明らかである。彼は相手の身分や、不名誉な過去などに一切とらわれず、両者の愛し合っている意志を何よりも重んじて行動する人物であった。そして、武者小路の離婚は房子の浮気が原因で破綻したのであるが、武者小路はまるで負けないような態度で直ちに安子に積極的に近づき、間もなく再婚した経緯から見ると、武者小路は二回とも積極的に自分の結婚をリードし、行動したことが判る。彼には魯迅のような自己抑制、自己犠牲に向かう形跡が全くなかった。

この離婚、再婚を経験したためか、四年後に創作した戯曲『愛欲』（『改造』一九二六年・一）と、その続編である戯曲「ある画室の主——愛欲後日譚」（『改造』一九二六年・九）等において、男女関係をめぐる葛藤、嫉妬、動揺についての描写が一段と色濃く、深刻に現れている。

まず、『愛欲』（同上）を取り上げて分析したいと思う。『愛欲』の主な登場人物は兄弟である二人の男性と一人の女性である。この設定からも、男女の三角関係を描く意図が判る。そして、内容としては、主人公の英次が妻と兄との関係を疑い、嫉妬したあげく、妻を殺してしまったという構成になっている。その主人公の疑いから殺しまでの心理過程についての描写は武者小路の作品にそれまでに見られなかった深刻さと鋭さがあったために、上演された当初、心理劇、問題劇として直ちに好評を博した。

次に「ある画室の主——愛欲後日譚」（同上）について述べたい。この戯曲は副題で示されているように、『愛欲』の主人公英次が十年後になっている設定である。人殺しの過去を持っている英次が又美しい女性と巡り合って、そして、彼女に深く尊敬されている。せむしの英次は、彼女が若い男性に引かれているのを知りながら、また、彼女を愛する資格がないと思いながらも、彼女を失いたくない気持を抱いている。この作品が『愛欲』と異なるところは女を殺してしまう残酷な結末ではなく、男主人公が葛藤、嫉妬を乗り越え、最後に彼女を理解し、別れたところで幕を閉じている。

この二作品に共通する主題、特色は男主人公の嫉妬、葛藤に満ちた心理を描写するところにある。この点から見ると、作者は自身の離婚、再婚を体験したからこそ、男女関係を

人間の業として認識し、深刻に描写することができたと言えよう。

魯迅の方は武者小路と逆で、初回の結婚は全く受け身的で、愛情のない結婚生活を長年我慢した。そして、魯迅も武者小路と同様に「女郎買い」にする人間を幾たびも批判したことがある。禁欲を無理やり自らに課し、自らの幸福を犠牲にし、自分の人間としての欲望を押し殺してしまったばかりでなく、結婚相手をも共に犠牲にさせてしまったと言えるであろう。この封建的な婚姻制度と、自分の弱さによって、二人が共に不幸となったのを魯迅は人一倍感得したに違いない。しかし、愛情のない、形だけの結婚生活を二十一年も維持したことから見ると、魯迅は相当自制心の強い性格の持主であることが判る。もし許広平の存在がなければ、魯迅は恐らくそのまま一生を「犠牲」にし続けたであろう。幸い許広平が魯迅の生活に割り込み、魯迅に自ら愛を求める力を与えた。許広平の力によって魯迅は自我との闘い、社会との闘いを経てようやく愛情のない生活から解放されたのである。しかし、朱安に愛を与えたこともなく、更に孤独に突き落としたことに対して、魯迅は自責の念に苦しめられていたに違いない。そのやり場のない自らの悔恨、懺悔の気持は極めて深刻なものであり、自ずと創作の中に流露している。それは魯迅の唯一の、恋愛と結婚に関する『傷逝』という小説である。この作品の中で、主人公の精神的な苦痛と切ない懺悔の気持を感動的に描写している。勿論、作品として創作する以上、事実そのままはならないのは当然であり、事実上、朱安は子君（女主人公）のような悲惨な運命になっていない。この作品についての詳しい分析は拙稿<sup>注10</sup>を参考していただきたい。一言でこの作品の最もすぐれた描写を要約すると、男主人公は、亡くなった女主人公の前に懺悔できるためならば、地獄にでも入りたいという痛々しく、悲愴な気持を克明に書き上げたところにある。つまり、魯迅の最初の結婚は時代の産物であると同時に、魯迅自身のやさしさと弱さによってもたらされたものであった。

武者小路と魯迅の最初の結婚の経緯から見ると、武者小路は相手の品行より愛情と性を重んじる結婚であり、魯迅は当時の常識とされた行動を取ったがゆえに、愛情のない、性生活をとまなわぬ結婚を甘受することになった。どちらも健全であるとは言えないので、失敗に終わってしまうのも当然であろう。

以上の説明から判るように、武者小路は離婚から再婚までに至る過程はそれほど苦もなくやり遂げたのに対して、中国の半封建時代にいた魯迅は同棲の形に止まっている事実からも判るように、その過程において大変な苦闘があった。

一九二五年に魯迅が許広平と出会い、交際を重ね、一九二七年に上海で同居するまで、

魯迅が妾を囲ったと攻撃されたり、高长虹が『狂飈』（一九二四・十一～二五・三）に「くれてやった」という詩を発表し、悪口雑言を魯迅にぶついたりした事があった。一方、魯迅も小説「奔月」（『故事新編』の中的一篇 一九三六年刊）、詩（『唐宋傳奇集』の最後の四言詩 一九二七～二八刊）などを書いて反撃したが、実際のところ、前にも触れたように、朱安とは離婚せず、許広平とも挙式、入籍もしなかった。このような曖昧なやり方に魯迅の人道主義と個人主義を混ぜた人生態度を窺うことができるのではないか。つまり、四十九歳になる朱安と離婚すれば、彼女はとても自立して生活するのが不可能な事は明白である。朱安と正式に離婚せず、生活費を送り続けたのは魯迅が人道主義の考えを持っているからである。その一方で、離婚しないで、朱安を一人置き、許広平と一緒にするのは魯迅の個人主義の所産である。正に魯迅自身が語ったように彼は「人道主義と個人主義の二つの思想の起伏消長」<sup>註11</sup>の矛盾に満ちた人間であった。

そこまで魯迅に矛盾した生き方を強いた背景はどういうものであるか考究する必要があると思う。一九二五年十一月、つまり、許広平と書信をもって交際する最中、魯迅は雑感第一集『熱風』の随感録四十において、次のように語っている。

・・・女性の側にはもともと罪はなく、現在は古い習慣の犠牲になっているのである。我々はいまや人類の道徳を自覚したのだから、良心に照らして、彼ら若い者、老いたる者が犯してきた罪を自ら繰り返すことはできないし、なおさらまた罪なき異性を責めることもできない。となれば、犠牲者である彼女らの相伴をして、自らの一生を犠牲にすることによって、四千年の古い帳簿に締めくくりをつけるしかないのである。<sup>註12</sup>

上の引用から見るかぎり、魯迅は朱安と愛情のない生活を一生続けようとした。この覚悟を文章にして発表した以上、自ら示した姿勢を破るのは気が引けるのは当然であろう。これは魯迅が朱安と正式に離婚しない理由の一つでもあり、ある意味では文章に表した通りに、「共に犠牲になった」であろう。

先人の研究に触発されながら、私がここでまず魯迅の初回の結婚から同棲生活への転換の軌跡にそって、魯迅が朱安を最初から最後まで拒否し続けた深層心理を考察したい。当時、二十五歳の青年魯迅は既に日本で自由、民主及び真の人間性はどういうものかを考え、目覚めつつあったという背景を提起したい。つまり、魯迅の内面では母親を代表とする「旧」との繋がりが強固な一方、自我が目覚めた「新」への追求も盛んに行われているのである。正に「新」と「旧」の間に挟まれている状況の中にいる魯迅が、表では母親が取

り決めた結婚を受け入れ、実質ではこの強制された結婚を認めず花嫁を拒否し続けた。その時代において目覚めた知識人としての魯迅はこのように旧思想と新思想が絡んだ行為を取らざるを得なかったのである。この人間性を無視するような旧制度に苛まれた魯迅が、悲痛極まる心情で『熱風・随感録四十』において次のように吐露したことがある。

・・・まるで二匹の家畜が「ほら、お前たちおとなしく一緒にいるんだよ」という主人の言いつけに従ったようなものだ。<sup>注13</sup>

したがって、魯迅は旧制度に妥協できない自覚と相手の朱安には非がないという認識の下で、妻としては認めないが、人間として尊重し、経済の面で支えたという奇形の夫婦関係を一生維持し続けた。

しかし、この精神的な苦痛が魯迅の心を傷つけたと同時に、この旧制度の毒害の広さと深さを知らせ、それを憎む力をも与えたのであろう。この不幸の結婚が恐らく若い魯迅にとって人生の第一課となり、この旧制度を生んだ旧中国を改造しなければならないという人生目標を、その当時ではまだ漠然ではあるが、設定させる役割を果たしたと言えよう。魯迅は結婚当夜、一晩中泣いたという証言もあり、結婚四日後、花嫁を置き去りにした事実も明らかになっている。日本に戻った魯迅は、専ら文芸をもって旧中国の社会制度を改造し、古い思想を持っている母親と、新しい思想を受け入れない朱安を含む民衆の目を覚まさせる運動に専念するように傾いて行った。この時期において魯迅は旧体制国家の作家が書いた書物を研究し、進化論に関する論文を多く書き上げたことが挙げられる。多くの活動の中で最も注目になる事が一つある。それは結婚後日本に戻った翌年の一九〇七年に魯迅が許寿裳、周作人等と、若者達のために新しい文芸雑誌を創ろうとしたことである。その雑誌のために「新生」という象徴的な名前まで付けたが、資金の問題でこの雑誌は流産に終わった。言うまでもなく、最初の結婚が不幸であったために、魯迅が急に新しい思想の持主になったのではなく、彼は苦痛、模索、徘徊、脱出という長い道程を遍歴しなければならなかった。別居生活が二十一年も続いた事実からも、その歩みの難難辛苦の一端が窺える。

魯迅が新思想、新道徳を紹介し、旧思想、旧道徳を批判し、そして、そのすべてと闘ううちに、魯迅が自身の新しい婚姻生活のスタートを肯定的に考えるようになった。それは生涯封建的婚姻制度の犠牲者となって、自分を古い思想に生きる人間とするよりは、新しい思想を持つ人間になるべきという思想からであろう。この発想は魯迅と許広平との相互の啓発によって得られたもので、『兩地書』の中で「私は愛することができる」<sup>注14</sup>という



## 「結婚生活を通して見た武者小路と魯迅」

魯迅の決意のような言葉に具現されている。従って、魯迅と許広平との再婚は同じ志を抱き、同じ人生観によって誕生した夫婦であり、古い婚姻制度との決裂と見なすことができる。そして、従来の「結婚制度」にとらわれない「同棲」の形を敢えて実行したことによって、新しい思想を持つ魯迅の生活に対する斬新な姿勢が明らかに浮かび上がってきたと言えるのではないか。

この二回目の健全な結婚があったからこそ、魯迅が人生の後半において、前半より創作の数量が二倍ほど増えることができたのである。<sup>註15</sup> 恋愛は半人格であり、結婚が全人格であるという言葉が示しているように、健全な結婚生活は魯迅の人生に大きなプラスをもたらしたと言えよう。

魯迅自身は二回目の結婚について語ったことはない。しかし、『奔月』（同上）という小説の中で、昇天した若い嫦娥についていく男主人公を称えており、魯迅が新しい生活を始めるのに対して肯定だったことを暗喩的に示すものと思われる。

魯迅が生きた中国では封建制度が根強かったことに比べ、武者小路が生活した日本では、すでに近代思想がある程度根を下ろしていたので、離婚も再婚も、比較的気楽に乗り越えられた。勿論、新聞、雑誌に非難されたが、彼は公然とした態度で『或る男』（同上）を書いて自分のために弁解した。両者の婚姻生活の相違点は日本と中国における社会背景、文化、婚姻制度の違いの他に、二人の性格、人生態度も異なっていたからであるが、最も大きな違いとしては、武者小路は感情の好悪によって、周囲の反対を容易く乗り越え、自由に選択できたのに対して、魯迅の方は旧社会の婚姻制度に負けはしたが、新道徳をもって、自己を律し、朱安との性生活を犠牲にするという消極的な方式を用いて、自分なりに旧制度に抵抗した。この意味で魯迅は武者小路より数倍の苦痛を味わい、多大の犠牲と努力を払ったということであろう。

両者の二回目の結婚は前回の教訓を受け、性格、品行を見て相手を選択した。武者小路の方は教養のある、性格が控えめな安子と再婚した。前後の結婚相手を比較して見ると、武者小路は最初の個性的な考えから常識的な婚姻観へ変わっていった傾向がある。魯迅の方は、初回の受身の立場から主動的な結婚観に転換したと言える。両者が逆の方向で再婚に挑んだのは両者のその時期の生き方と関連しているのではないかと見られる。

## おわりに

武者小路に関する時代区分を調査するうちに、彼の思想の変化は彼の結婚、再婚と密接に関連しているのを発見した。

本多秋五は、一九一〇年からの時期を自我中心主義の時代、一九一八年からの時期を新しき村時代と後期の生命礼讃の時代、と区分している。<sup>注16</sup> 大津山国夫は、一九〇八年から一九一七年までを個我の時代、一九一八年から一九二五年までを新しき村、共生の時代、と定義している。<sup>注17</sup> こうした研究の成果からも、なぜ武者小路が正反対の結婚相手を選択したのかが明らかになる。初回の結婚は個我、個性を何よりも重んじた上での選択であり、再婚は常識性、調和性を追求する上での選択であったと言えるのではないか。

魯迅の方では、最初の結婚時は日本留学の四年目で、新しい思想、知識に触れたとは言え、まだ確固とした思想を持ってはいなかった。しかし、一九二七年の時期に魯迅は既に『狂人日記』、『阿Q正伝』、小説集『呐喊』等を書き上げ、旧社会を批判し、新道徳を提唱する作家までに成長していた。思想上の成熟があったからこそ、一回目の受け身的な結婚に比べると、百八十度の変化を遂げ、二回目の再婚が成就できたのである。時代の受難者魯迅はこの幸せな再婚によって少なからず慰められたに違いない。そして、この再婚は二人の個人にとっても、社会にも、歴史にもプラスになるところが大きかったと言えよう。

注釈：

- 1 【武者小路実篤全集】一卷 一二一頁 小学館 一九八七・十二
- 2 【武者小路実篤全集】五卷「或る男」三一七頁 同上
- 3 【武者小路実篤全集】五卷「或る男」三二八頁 同上
- 4 【武者小路実篤全集】十七卷「一人の男」 四頁 一九九〇・六
- 5 【武者小路実篤全集】十七卷「一人の男」 五二頁 同上
- 6 馬蹄疾著【我可以愛】三六頁 四川文芸出版社 一九九五・三
- 7 【魯迅全集】一四卷 四二六頁 学習研究社 一九八五・六
- 8 【武者小路実篤全集】一卷「彼」九頁 同上
- 9 【武者小路実篤全集】一卷「世間知らず」一三五頁 同上
- 10 【日本文学研究紀要】第八集 五一～六三頁 あるす出版社 一九九七・三
- 11 【魯迅全集】一三卷 一〇八頁 学習研究社 一九八五・四
- 12 【魯迅全集】一卷 四〇三頁 学習研究社 一九八四・十一
- 13 【魯迅全集】一卷 四〇一頁 学習研究社 一九八四・十一
- 14 【魯迅全集】一三卷 四一〇頁 学習研究社 一九八五・四
- 15 【許広平文集】一卷「従女性的立場説“新女性”」一一〇頁 江蘇文芸出版社  
一九九八・一
- 16 【本多秋五全集】第十卷 十三頁 菁柿堂 一九九六・二
- 17 大津山国夫著【実篤と新しき村】四〇二頁 明治書院 一九九七・十